

日田木青会だより

2026
令和8年度
4月号
日田木青会広報委員会事務局
日田市大字東有田字新山2776-6
TEL.0973-24-2167

それぞれの一年

— 令和7年度を振り返って —

令和7年度の活動を振り返り、各委員会の皆様より一年を通しての想いや取り組みについての所感をご紹介します。

この一年、木青会の活動を通じて、多くの学びと新たな出会いを得ることができました。日々の活動の中で、改めて木材業界の奥深さや広がりを実感する機会が多く、自身にとっても充実した一年となりました。

特に九州大会では、九州各地で同じ業界に携わる仲間と直接交流することができ、それぞれの地域の取り組みや考え方に触れる中で、大きな刺激を受けました。また、業界が抱える課題や今後の方向性について意見を交わすことができ、大変貴重で有意義な時間となりました。

開会宣言では少し噛んでしまう場面もありましたが、それも含めて今となっては良い思い出であり、自分自身にとって忘れられない経験となりました。

日々の活動を支えてくださった皆様に感謝するとともに、これからも仲間と共に木材業界の発展に努めていきたいと思っております。

記事／権藤 敏裕



大分県木材青壮年連合会
令和7年度会長
権藤 敏裕

大分県木材青壮年連合会 令和7年度会長ご挨拶



令和7年度研修委員会委員長
横尾 昌紀

研修委員長ご挨拶

本年度、研修委員会は「木の魅力を伝え、次世代へつなぐ」を使命に掲げ、地域と未来を見据えた事業を積極的に展開してまいりました。夏休み木工教室ではコープ様とタイアップし、参加枠は例年同様としながらも開始早々に定員へ達するなど、大変盛況のうちに終えることができました。子どもたちが真剣な表情で木と向き合い、完成した作品を誇らしげに手にする姿は、木材の持つ温もりと可能性を改めて実感させてくれるものであり、地域における本事業の定着と期待の高まりを強く感じる結果となりました。

次年度は受入枠の拡大も視野に入れ、より多くの子どもたちへ機会を届けていきたいと思っております。

また、「木と暮らしのフェア」における木工教室では、幅広い世代へ木の魅力を発信し、木材利用の普及啓発に貢献いたしました。昨年より始まった夢授業は本年度さらに拡充し、6回実施。中学校を中心に、林業・木材産業分野の担当を木青会が担う形で参画し、業界の現状や将来性、働く意義ややりがいなどを直接伝えることができました。次世代へ向けた確かな種まきができたと確信しております。

一年を通して、体験と学びの両面から木の価値を発信できたことは大きな成果であり、会員相互の結束もより強固なものとなりました。本事業で得た経験と手応えを次年度へ確実に引き継ぎ、木青会の存在価値をさらに高めていければと思います。

記事／横尾 昌紀

卒業生コメント 20年の歩みと感謝、 そして次世代へ



令和7年度卒業生
小田 裕一郎

今回日田木青会を卒業することになりました、有限会社力ネモリ小田製材所の小田裕一郎です。活動を振り返るにあたり、事務局に僕がいつ入会したのか調べてもらいましたら、平成18年6月の入会でした。それを聞いて、20年在籍していた事を改めて考えると、長いようであり、あっという間だったなと感じています。

入会した当時は、木青会だよりを自主製作しており、初めて行った広報委員会、たまたま作成ソフトを使えたことで、数年間は木青会だより担当になり、その作業と年に一回の職域ソフトボール大会に集中して頑張っていました。

木材業界の事を何も分からないまま入会しましたが、木青会活動を通じて先輩方から様々な事を学ばしてもらったおかげで、今こうして仕事ができていると感じています。

今後は、この会で学んだ事を活かしながら、地域の林業・木材産業の発展のため、また頼

れる後輩たちの日田木青会活動がより良くなるよう、微力ながら貢献していきたいと思っております。

最後になりますが、これまでご指導ご支援を賜りましたすべての皆様に心より御礼申し上げます。木青会のさらなる発展と、会員皆様のご健勝とご活躍を祈念し、卒業の挨拶とさせていただきます。本当にありがとうございます。

記事／小田 裕一郎

つながりが財産に 木青会で得た10年



令和7年度卒業生
坂本 国亮

日田木青会に入会し、約10年となり、この度木青会を卒業する事になりました。日田木青会を通じて様々な人との繋がりができた事が一番の収穫であったと思います。自己啓発という面においても、多種多様な考え方を共有する事ができ、それを自分の経験に生かす事ができました。

自分達が先輩から教えて頂いた事や、感嘆した事を全て後輩に伝えられたとは思いませんが、会員数が減少する今後は、若い会

員達の新しいやり方で日田の木材業界を盛り上げて頂けたらと思います。

最後になりますが、日田木青会活動にご理解ご協力頂きました全ての方に厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

記事／坂本 国亮

支えられて歩んだ 3年間に感謝



令和7年度卒業生
杉林 敏宣

3年という短い期間ではありましたが卒業を迎えることとなりました。業界経験も浅く、右も左も分からないままのスタートでしたが、先輩方や仲間の皆さまに温かく支えていただき、多くのことを学ばせていただきました。

皆さんと活動した時間はとても楽しく、貴重な経験となりました。ここで頂いたご縁と経験を大切に、これからも業界の一員として精進してまいります。

本当にありがとうございました。

記事／杉林 敏宣

新入会員を募集しております！お気軽にお問い合わせください！



【広報委員長ご挨拶】



令和7年度広報委員長
一ノ宮祥二

今年は木青会だよりを3回作成しました。現状会員数が減少傾向の為、同じ会員の方に何度も記事の提出をお願いするのが当たり前になってきました。そんな状況下でも心良く受けて下さり、滞りなく例年通り木青会だよりを作成する事が出来ました。

奉仕活動は2回行いました。この活動も各会員忙しい中スケジュールを合わせて頂き、無事に実行する事が出来ました。今回一回目の竹田公園から旅館街の清掃時に土手だけではなく、普段は歩かない川岸まで降りて清掃したのは良い判断だったと思いました。古くからある埋もれたゴミを回収する事ができ良かったと思います。

この一年間、会員の皆様ならびに事務局の多大なサポートのお陰で、無事広報活動を終える事が出来ました。ご協力ありがとうございました。次年度も引き続き、よろしくお願い致します。

記事／一ノ宮祥二

九州木材青壮年連合会を振り返って



九州木材青壮年連合会会長
安心院 啓

改めまして、令和7年度九州木材青壮年連合会(以下、九州木青連)の会長を仰せつかっております安心院啓でございます。

今回令和7年度の活動についての総括ということですが、まだ年度内(令和8年2月現在)なのでさしあたり現在までの活動の寄稿をさせていただきます。

私自身が今年度の九州木青連活動の準備を始めたのは遡る事2年前、代行副会長の役職をいただいた所からスタートいたします。その頃は一年の大まかな流れの確認や現在の議案・申送り事項の共有がメインでした。しかし、実際会長として活動をスタートすると自身の能力・経験不足が露呈してしまい、初っ端からメンバーに迷惑をかけてしまい、ほろ苦いスタートとなりました。

北海道研修で学ぶ「雪と林業」の新たな視点



去る一月、日田木青会並びに大分県木材青壮年連合会合同による北海道研修旅行に参加させていただきました。本研修は、普段私たちが従事している九州の林業とは全く異なる環境に触れ、その違いの中から新たな気づきと学びを得る、大変貴重な機会となりました。

北海道の地に降り立ってまず圧倒されたのは、その圧巻の積雪量でした。現地の方からは「新潟や北信越の方が雪は多い」とのお話もありましたが、九州で暮らす我々にとって、日常の風景として膝丈まで雪が積もるという現実、まさに別世界でした。空港を出てすぐにバスにて移動を

今年度の事業としては台湾事業(台中木青會)との交流、九州木青連大会の開催がメインとなりました。特に台湾事業に関しては交流内容が一つの課題でしたが、内容としては大きく分けて2つの団体を行いました。一つはその台中木青會の皆様、そしてもう一つは台湾全土より木材業者が参加されるゴルフコンペ及び懇親会への参加です。

特に台中木青會は長年の準備を経て今年発足した団体で、発足のお祝いも含めて訪問させていただきました。会員の方々の会社訪問をさせていただき、その後懇親会を行いました。

今年度(初年度)会長のSOCO会長もまだ若く、非常にエネルギーシユな印象をうけました。とはいえやはり大きな団体を運営していくには課題があるようで、我々との情報交換を楽しみにおられました。我々日本側としても学ぶべき点も数多く、エネルギーを感じました。そして何より台中の木材業界の歴史的なページに立ち会うことができました事、非常に有意義に感じました。国は違えど木に対する真摯な気持ちは変わりなく、言葉では表現できないような熱いものを肌で感じられたことは大きな財産になりました。

また、2日目には台湾全土より参加

開始し、苫小牧広域森林組合様およびヨシダ製材所様にて見学・研修を行いました。特に強く印象に残ったのは、目の前に広がる膨大な丸太の在庫量とその理由でした。九州では雪が降ると出材が滞るのが一般的ですが、北海道では逆に雪を活用し、作業道を確保することで効率的な搬出が可能となり、冬こそが出材の最盛期であるという点に大きな衝撃を受けました。同じ「雪」でありながら、それを障害と捉えるか、資源として活用するか。この発想の違いは、今後の林業のあり方を考えるうえで非常に示唆に富むものでした。

また、扱われる材種も九州とは大きく異なり、建築向けの製材ではなくパレット等の梱包用向けであり、主にカラマツやトドマツが中心でした。カラマツはヒノキのような用途、トドマツはスギに近い感覚で利用されており、地域による樹種の違いと、それに適応した利用方法の工夫を学ぶことができました。寒冷地特有の影響で年輪は非常に緻密で材質は均一である一方、枯れ節が多いという特徴もあり、その長所と短所を理解したうえで活用していく重要性を感じました。

さらに、凍結した丸太を扱うという環境にも関わらず、製材後の反りや狂いが想像以上に少ないという点にも驚かされました。現在新たな取り組みとしてトドマツ、カラマツを建築材として使えないかの検証も行きました。

様々な笑いと刺激に満ちた交流事業でしたが、気づきも多く、これからの木材産業にとつてのヒントがたくさん散りばめられているような印象をうけました。そして若い英知と情熱を結集し、不屈の精神をもってまさに動き始めた台中木青會のメンバーに心よりエールを送りたいと思います。

続きまして2つ目の大きな事業であります九州木青連九州大会。大会ですが、11月に開催いたしました。早くより横尾実行委員長と共に会場の確保から始まり、大会の内容や予算、導線の確認等綿密に打ち合わせを繰り返してまいりました。その中でいろいろ課題や問題点が発生し、模索する場面も多かったのですが、やはりチーム日田、チーム大分として現役・OB問わず沢山の皆様からのサポートがあり、大変心強く、安心して準備を進めることができました。この場をお借りして皆様には厚く御礼申し上げます。大会当日も様々な企画を用意して皆様に有意義な時間と会員一同でおもてなしさせていただきました。

われておりました。こうした材を建築材として活用していく取り組みは、今後の可能性を大きく広げるものだと感じました。

2日目はあじの降雪により移動が制限され、札幌市内での研修となりましたが、その中で札幌雪まつりの準備風景を見学する機会に恵まれました。巨大な雪像が人の手によって形作られていく様子は圧巻であり、厳しい自然条件の中でもそれを文化として昇華させている北海道の力強さを感じました。

今回の研修を通して強く感じたのは、「地域の自然条件を受け入れ、それを最大限に活かすこと」の重要性です。北海道では雪という一見不利に思える条件さえも林業の強みへと変え、地場の木材を中心とした独自の産業と文化を築き上げていました。九州で林業に携わる私たちもまた、自分たちの地域の特性を改めて見つめ直し、その中にある可能性を最大限に引き出していく必要があると思います。今回の研修で得た学びと気づきを決して一過性のものとせず、日々の業務の中で実践し、地域林業の発展に繋げていくことが自分の使命であると強く感じています。

この貴重な機会を与えていただいた日田木協の職員の皆様、並びに関係者の皆様に深く感謝申し上げます。ともに、今後も学び続ける姿勢を大切にしながら、自身の成長と地域への貢献に努めてまいります。

記事／若松亮太

色々と粗相があったとは思いますが、何より他県メンバーや来賓の方々、日本木青連の常任理事の皆様、沢山の笑顔を見ることが一番の喜びとなりました。横尾委員長、大変お疲れ様でした。

他にも九州以外の活動として日本木青連の常任理事としての活動や各地区の会長とのやりとり等、非常に濃密な1年間でした。そういった中で自身が経験させていただいたものは何物にも代え難いものとなりました。その一つが人とのご縁です。様々なバックヤードを持つ方々と共通する目標に向かって様々な議論や思想を重ねていく。この経験は一人の人間として、そして一人の経営者としてとても勉強になることばかりでした。このままいけば大分県にまた輪番が回ってきます。その時誰かがこの役職を受け、全つし、その時代に合った成長をしていく事を心より楽しみにしております。

最後に重ね重ねになりますが、1年間支えていただきました。本当にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

記事／安心院啓

